

自ら学び、考え、行動する生徒の育成

～新聞を活用した活動を通して～

上越市立中郷中学校

1 学校の概要

中郷中学校（山岸賢一校長、生徒数 66 名）は、旧北國街道沿いの高台に位置しており、周囲は豊かな自然に囲まれ、四季折々の彩を感じることができる。

学区内には、小・中学校がそれぞれ 1 校ずつあり、隣接しているという地域性を生かし、9 年間を通して、地域に根差した教育活動を実践している。中郷区は、地域と学校の連携を円滑に進めるために、小・中学校、地域、行政を包括する「中郷区さとまる学校」が設置されている。未来の中郷を創っていく子どもたちが、中郷に学び、中郷を愛する心を育めるよう「自己有用感」を合言葉に学校と地域が協力して総合的な学習が進められている。

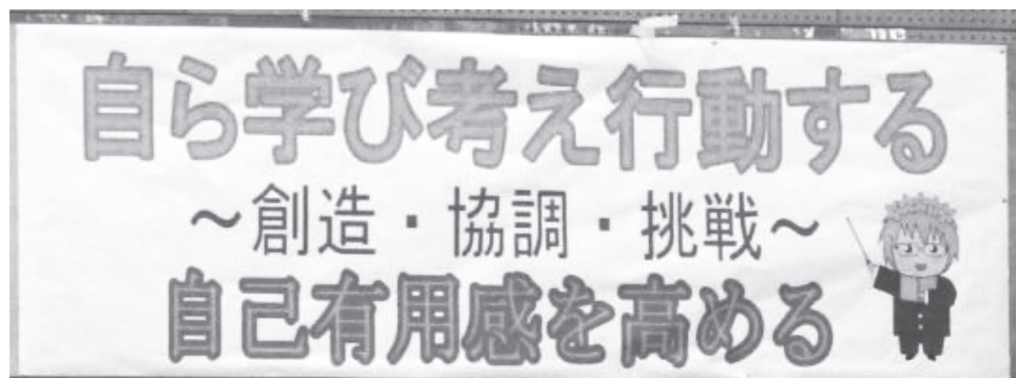
2 N I E 実践のねらい

(1) 研究主題とのかかわり

本校は、「主体的に学ぶ子どもの姿」を「自ら見通しをもち、考え、行動する生徒」とし、研究主題を「自ら学び、考え、行動する生徒の育成～自己有用感を高める学級集団づくりを通して～」とした。そこで、2 年継続の N I E の活動を研究主題に迫るためのひとつの方策と捉え、小規模校ならではの利点を生かし、全校体制で取り組めるよう総合的な学習の時間に視点をあて、「新聞活用から課題を捉え、課題解決に向けて、読み取ったことを活用しようとする態度を身に付ける」また「新聞活用から調べ、考えたことを基にして、わかりやすく伝える力を身に付ける」ことを N I E の活動の目標とした。

(2) 生徒の実態

「自己有用感」をキーワードに、互いを認め合える、支え合える、磨き合える関係づくりを目指し、「クラス会議」を取り入れて、安心して学校生活が送れるような環境づくりに努めてきた。さらに、自分の考えに自信をもって、学級や集団の中で伝える力の向上を目指すことが求められている。そこで、自己有用感を高める授業づくりに N I E の視点や活動を取り入れ、新聞を活用することから、自分の考えの根拠を明確にし、より具体的に相手に意見を伝えられる生徒が育成できると考えた。



3 本年度実践の概要

1 学期は、とりあえずやってみる期！

(1) 教師と生徒の学習会の開催

①職員研修

「これからのNIE推進について」柳澤 淳様（NIE担当アドバイザー）

「新聞の基礎理解」 木村 隆様（新潟日報社読者局 参与）

②全校授業「新聞の基礎理解」木村 隆様（新潟日報社読者局 参与）

(2) 新聞に触れる環境づくり

- ①学年ごとの新聞を読む場所の設定
- ②全校生徒が読める新聞記事掲示場所の設定
- ③朝読書で新聞を読む時間の設定



(3) 学年や委員会での活動

- ①日直によるお薦めの新聞記事の発表（1年）
- ②新聞記事を iPad でスクラップ（2年）
- ③きらきらキラリへの応募（3年）
- ④新聞閲覧場所の管理（図書学習）
- ⑤おすすめ記事の放送（広報放送）
- ⑥夏季休業中の選択課題に新聞記事コンクール応募（国語科）

2 学期は、実践期！

(1) 各学年でのN I Eを取り入れた総合的な学習の展開

(2) ト教大支援プロジェクトとの連携

上越教育大学院中平研究室と学習内容や資料選択等の協力体制の構築

(3) 学習会の開催

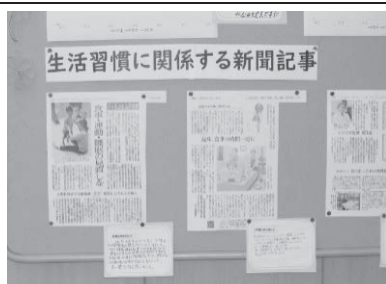
全校授業「新聞の作り方・書き方」木村 隆様（新潟日報社読者局 参与）

(4) 新聞に触れる環境づくり

(5) 学年や委員会での活動

- ①日直によるお薦めの新聞記事の発表（１年）
- ②記事のスクラップから新聞づくり（２年）
- ③北海道函館市立南茅部中学校との交流（３年）
- ④週１回の新聞記事の要約活動（全校）
- ⑤新聞閲覧場所の管理（図書学習）
- ⑥おすすめ記事とクイズの放送（広報放送）
- ⑦健康に関わる記事による啓発活動（保健給食）

【要約活動 2 年 Ver.】



(6) 2 学期の総合的な学習			
学年	1 学年	2 学年	3 学年
テーマ	「福祉」	「職業」	「防災学習」
NIE に関 わる 主な 活動	(1) 訪問時のインタビュー活動 (2) 福祉に関わる新聞記事の回し読みと新聞作成 (3) 新聞づくりによるまとめ	(1) インタビューの仕方についての学習 (2) 職場体験時のインタビュー活動 (3) 新聞づくりによるまとめ	(1) 防災に関わる新聞記事の回し読みと新聞作成 (2) 単元のそれぞれの段階での新聞記事を活用した学習 (3) 新聞記事の作成によるまとめ (4) フェイクニュースの作成と気づき

4 実践例

(1) 1 学年 総合的な学習の時間「高齢者が元気になる新聞を作成しよう」

① 本時のねらい

壁新聞の記事について互いに推敲を行い、読み手に伝わりやすい新聞記事の内容に再構成することができる。

② 構想とNIEとの関連

テーマごとに作成した記事を持ち寄り、互いに読み合ったり、アドバイスし合ったりすることで、互いに関わり合いながらよりよいものを目指して推敲に取り組む姿を目指す。そのため、これまでの学習で培った新聞を書く際の基礎的な知識（5W1H、正しい言葉・優しい言葉、逆三角形）を活用しながら、読み手を意識した内容になるよう指導を行う。

③ 推敲するための視点

ア 5W1Hを踏まえて書いているか

イ 高齢者の方に伝わる表現になっているか

ウ 書き手の伝えたいことが明確であるか

エ 相手の記事や広告、漫画の内容で自分も取り入れてみたいところ

④ 主な流れ

- ・記事を作成する過程で、面白いと感じた点や苦勞した点についてペアで意見交流する。
- ・テーマごとに記事を持ち寄り、どのような記事を書いているのか、グループで読み合い、互いの記事に付箋でコメントを記入する。
- ・コメントをもとに、どのように書き改めればよいか同じテーマ同士でアドバイスし合う。
- ・各自で、自分の書いた記事を読み直し、記事を書き直す。



(2) 2 学年 総合的な学習の時間「職場体験を成功させよう」

① 本時のねらい

読み手に自分が伝えたいこと（意見）が伝わる内容にするために、互いの新聞記事を読み合い、評価し合うことで、修正点を明確にすることができる。



② 構想とN I Eとの関連

1 学期は自分の興味のある記事や職業・生き方に関すると思われる記事をスクラップしたり、スクラップした記事を互いに紹介しあったりという活動を継続して行った。2 学期に入り、職場体験の事前学習で、職場体験後には体験での学びを新聞記事のようにまとめることを意識させ、記事づくりで意識する点や情報の集め方（インタビューの仕方）についての学習も行ってきた。

これまでの学習内容を生かしながら、職場体験中に書いた日誌とインタビューメモを基に、自分の伝えたいことを中心に新聞形式でまとめさせることで、自分の意見や思いを他者に伝える力の向上を図る。また、評価やアドバイスをする際には、新聞の作り方で学んだことを評価項目として用いる。

③ 評価する際の項目

ア 惹きつけられる見出しか

イ わかりやすい内容か（5 W 1 H，事実と意見の書き分け）

ウ インタビューが上手に使われているか

エ レイアウトはどうか

オ ストーリーは一貫しているか（見出しと記事の内容が繋がっているか）

カ 何を伝えたいかがわかるか

④ 主な流れ

- ・ 自分の作成した新聞を見直し、訂正があれば赤字で書き込む。
- ・ 事業所ごとに、互いの新聞を読み合い、体験内容についてアドバイスし合う。
- ・ 生活班で、互いの新聞を回し読みし、項目ごとに評価やアドバイスし合う。
- ・ 全体に紹介したい工夫を発表する。
- ・ 友達からの評価やアドバイスを基に、修正点を明確にする。



(3) 3 学年 総合的な学習の時間

「地域防災について考えよう

～新聞をつくる、伝える、伝わる、フェイクニュースに気がつく～」

① 単元のねらい

- ・防災や地域についての新聞づくりから、課題解決のために、情報の収集、整理、分析の過程を通して、自己の考えをまとめ、表現することができる。
- ・防災や地域についての新聞づくりや意見交換を通して、自己の考えを広げ、深めることができる。
- ・防災や地域についての新聞づくりや意見交換を通して、情報の重要性を理解するとともに適切に取捨選択しながら社会に参画しようとする意識を高める。



② 構想とN I Eとの関連

2 学期の防災学習では、ゲストティーチャーから防災についての講義を受けたり、避難所の設営・運営について実地体験を行ったりしてきた。生徒たちは、能登半島地震を経験したことで防災について高い関心をもっており、災害が起こった際、地域の役に立つために中学生が取るべき行動について考えを深めてきた。

本単元は、防災学習のまとめとして、これまでに学習してきた内容を新聞記事にまとめることを中心に進める。これまでの学習を生かしながら、フェイクニュースを含んだ新聞を作り、それを読み解く活動を通して、必要な情報を取捨選択し、自ら適切な行動選択ができる生徒を育成したいと考える。



③ フェイクニュースを取り上げる理由

生徒にとって身近な存在である SNS における速報性は、災害発生時において生命や安全を守るためになくしてはならない。しかし、虚偽情報で注目を集めようとするフェイクニュースが氾濫することで、災害時の混乱を加速させてしまう社会的な課題がある。そういった事態に対応していくために、フェイクニュースを作成することを通して、適切な視点でフェイクニュースと向き合い、意思を明確にし、自ら進んで行動できる必要性がある。



④ 主な学習活動

1	・フェイクニュースが引き起こす影響や社会的な課題について学ぶ。 ・フェイクニュースの見分け方を学び、実際にフェイクニュースを見破る活動をする。 ・意図せずにフェイクニュースに取り囲まれる場合があることを理解し、適切な行動選択について考える。
---	--

2	・ 1, 2 学期の学習で学んだことをもとに、新聞記事（フェイクニュース含む）を作成する。
3	・ 新聞記事の内容に相応しい写真を選ぶ。 ・ 優れたフェイクニュースをクラス全体で 5 つ程度選ぶ。
4	・ 作成した新聞記事（フェイクニュース含む）の中から、クラス全体で 6 つの記事を選ぶ。 ・ 選んだ記事を 1 つの紙面にまとめるためのレイアウトを考え、クラス全体で合意形成しながら決定する。
5	・ 北海道函館市立南茅部中学校から届いた新聞を読む。 ・ 記事の感想を班ごとに共有したり、質問を考えたりする。 ・ どれがフェイクニュースであるか、理由も含めて考える。
6	・ 北海道函館市立南茅部中学校とオンラインでつなぎ、互いの新聞記事について質問したり回答したりして、情報の重要性を理解する。

5 成果

(1) 成果

生徒アンケート（6 月、12 月実施）から、「新聞を全く読まない（-14.9%）」「新聞記事やニュースに関心がある（+7.1%）」「世の中の出来事やニュースを話題にする（+11.9%）」「新聞やニュースで得た情報をさらに調べる（+8.7%）」の項目で数値の向上が見られた。学校生活で、新聞が身の回りにあることが自然となり、さらに日々のニュースに関心をもつ生徒が増えたことがわかる。



また、上越教育大学支援プロジェクトとの連携が 2 学期に行われ、主に総合的な学習や要約活動で資料や指導内容の支援をいただいた。今までの総合的な学習に加え、新聞の記事を活用した学習を取り入れたり、全校授業で学習した視点を推敲や互いの作品の評価に取り入れたり、各学年とも学習の深まりが見られた。

(2) 課題

小規模校ならではの職員集団の機動力や協働性をフルに発揮しつつも、手探り状態で試行錯誤の 1 年目だった。2 年目は、1 年目で有効だった学習や諸活動を継続しながら、N I E を取り入れることで「どんな力を付けさせたいのか」を明確にするための見直しが必要である。

また、クラス会議を継続することで、関わり合いの土壌を固めつつ、「話す、伝える、表現する」

といったスキルの向上や「何を伝えたいのか」を意識させた学習活動を展開することでブラッシュアップを目指したい。

（小林 保子）

